

偶然と必然と相対的關係

2006.12.1 創造目的学会 理事 森田義彦

前書き

統一思想において「二性相の相対的關係」はきわめて重要な概念であるが、統一思想でなくとも「事物の關係性」は認識されていることである。相対的關係を一般的に言う關係性と同じように捉えた場合、相対的關係に続く論理は至極あたりまえか或いは数多い説の中の一つと受け止められかねないのであるが、「相対的關係」の概念の本質は一般的に言う關係性とは完全に違う。本論文は、この本質を明確に示すべく、偶然・必然の概念との比較において論じるものである。

本文

自然現象は偶然と必然に支配されているというのが今日の科学における一般的常識である。必然的に起きたこととして説明できないものは偶然に起きたこととして解釈される。しかし、現実世界を見てみた場合、実は、これだけではすべてを説明できないことを明らかにしたい。

現在の科学は、観察事実を基盤として、仮説を立て、その仮説によって観察事実を説明する試みによって、仮説の検証とともに、観察事実の原因を明らかにしようとするものである。

仮説を立てるときの材料は必然と偶然のいずれかに属し、その結果なされる説明も、当然、偶然と必然とによるものとなる。

たとえその説明に不完全さが残っていたとしても、科学者は説明できるところまで説明したことに矛盾を感じないので、これ以上のことに気がつくことは永遠にないであろう。

では、ここで、必然と偶然についてもう一度考えてみよう。

「必然とは、必ずそうなることを言い、自然的必然性と言えば自然的事象が因果關係に支配されることを言う。

一方、偶然とは、何の因果關係もなく、予期しない出来事が起きるさまを言う。」

(広辞苑より)

偶然には何の説明の必要性もなく、説明のつかないことは十把一絡げにして偶然と言われてきた。しかし、偶然といえども、起きるためにはいくらかの可能性が必要なので、確率が論じられることになる。

さて、本題に戻るが、必然でないもののなかで、確率がまったくないことが起きていれば、それは必然でも偶然でもない。

そもそも確率がなければ起きるはずがないではないか、とすべての人がおっしゃるであろうが、確率というものは、ある条件のもとに成り立つものである。

すなわち、確率とは、あらかじめ起きる可能性のある事象の中のひとつが起きたときにいうことである。

サイコロを振って1億回続けて1の目が出たとする。これは、確率としてはあることなので、そういうことが起きれば偶然と解釈しても問題はない。

ある遺伝子の塩基配列が突然変異して、違った配列になり、違った姿の生物体生まれる、ということも、確率としてあり得るので、どのような形の生物が生じても偶然ということの説明がつく。

しかし、その生物体に対応するもう一つの塩基配列をもつ生物が生まれたということになると、そこには合致という条件がある以上、偶然では説明がつかない。

このような例を、生物において探してみると、生殖器がもっとも良い例である。

ミジンコは、通常雌が単為生殖をして雌ばかりが増えていくが、生存危機が迫ってくると、雄が生まれ、雌雄の交接から受精を経て、耐久性のある受精卵が作られる。

この場合、耐久性のある受精卵によって生存率が高くなることは容易に推測できるので、そのように進化したのだろう、と考えるのであるが、問題は、なぜ、雌に対して雄が交配しうる形をしているのかということである。

ミジンコはかなり進化した生物で、それよりも前から交接は可能だったのだとすれば、単為生殖と雌雄の交接をする一番最初の生物にまで遡って考えてみればよい。その生物はすでに絶滅してしまっているかもしれない。しかし、ミジンコにおいて実現している生殖形態が達成された一番最初の生物が存在したことは間違いのないことである。そうでなければ、ミジンコの生殖形態はあり得ない。

一番最初の生物であるから、その一つ前の生物は、雌雄の交接が出来ず雌だけで繁殖していた生物ということになる。

もしかしたら、あと一步で交接ができる生物体だったかもしれない。

しかし、交接できないことに変わりはない。なので、雄の形は、突然変異によって変化し交接できるようになったとしか考えられないが、少なくとも雌の形と合致する条件を満たす必要がある。

さらに、偶然とはあらかじめ起きる可能性のある事象の中のひとつが起きたことであるのを思い出してみると、そもそも雌の形には何かと交接しうるなどという要件はどこにもなかったのが、雄が雌と交接しうる形になる可能性はあらかじめあったことではまったくくない。すなわち、偶然ではない。

にも関わらず、これは必然ではない。

その形というものは、何かから導きだしたものではないからである。

生存率が高くなるかどうかは、交接に成功し受精卵が出来てから言えることであって、未だ交接しうる形を見出していない段階においては言うことができない。

すなわち、この場合の交接しうる形は、偶然によっても、必然によっても、生まれてきたものではない。

このように、自然界の存在様相には、いわゆる偶然と必然だけでは説明のつかないことがある。

そして、それは、合致という要素を含んでおり、相互補完的な条件を互いに持ち、向かい合う関係を持っている。合致は、他のものでは代用が利かないという意味であり、絶対的な関係を意味する。

これが、統一思想でいうところの「相対的關係」である。

さらに、偶然と必然は現象の起きるさまであるが、現象は何らかの相互作用の結果である。一方、相対的關係は、相互作用の前提であるので、すべての偶然と必然の基礎的前提としても位置づけられる。

この相対的關係なくしては存在世界の成立を説明することは出来ないのも、相対的關係は存在世界の根本原理であり、森羅万象にあまねく成り立つ普遍的原理である。

現代科学の研究対象の外にありながら、これなしではいかなる現象も説明できない「相対

的關係」は、合致という要件を持つがゆえに設計者の存在を意味し、存在世界の設計者すなわち絶対者によって意図されて与えられたとしか言うことができないものであり、絶対者を因とする必然的關係である。

結論

一般的に言う關係性と相對的關係の根本的な違いは、前者が自然界における偶然や必然の結果としてもたらされるものであるのに対し、後者は自然界における偶然や必然によってもたらされるものではなく、かつ、偶然もしくは必然に含まれるものでもないことがわかった。また、偶然・必然といったいかなる現象が起きる前にも相對的關係は必ずなければならないということも認識できた。

すなわち、相對的關係は紛れもない原理なのである。また、この存在を理由として、その原因者である絶対者の存在が証明されるものである。

参考文献

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

原理講論

統一思想要綱 (頭翼思想)

創造目的学会 contact@pocs.info